浅海定線調査（要約）

小泉　広明・高坂　祐樹

目　　的

陸奥湾の海況の特徴や経年変動などを把握し、海況予報のための基礎資料を得るために、昭和47年度から実施しているものである。

なお、本報告は平成22年1月から12月までの調査結果をとりまとめたものである。

材料と方法

1　調査船

なつどまり（24トン、770ps、16.5ノット）

2　調査点

陸奥湾内の8点(図1)。

3　調査方法及び項目

調査方法は、平成22年度「資源評価調査事業」沖合海域海洋観測及び資源管理体制強化実施推進事業に関わる海洋観測調査指針(東北ブロック関係・平成22年4月・独立行政法人水産総合研究センター東北区水産研究所)に準拠した。

調査項目は以下のとおり。

①　海上気象

天気、雲量、気温、気圧、風向、風力、波浪

②　水色、透明度

③　水温、塩分

0m層、5m層、10m層、10m以深は10m毎の各層と底層(海底上2m)

④　溶存酸素

St.1～6の20m層と底層(海底上2m)及びSt.2、4の5m層

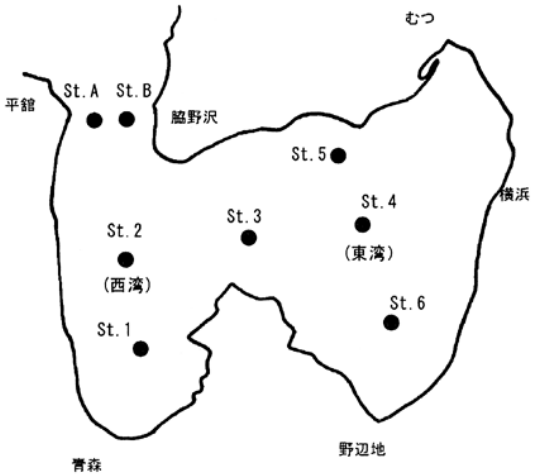

図1　調査点

4　調査回数

平成22年中に毎月1回、計12回実施

調査期日は次のとおり。

平成22年1月12日、2月15日、3月15日、4月6日・8日、5月13日・14日、6月9日・10日、7月5日・6日、8月2日・3日、9月8日、10月6日・7日・8日、11月17日・18日、12月6日・9日

発表誌：平成22年度資源管理体制・機能強化総合対策事業（資源管理に必要な情報の提供）浅海定線調査結果報告書、地方独立行政法人青森県産業技術センター水産総合研究所、平成23年2月

結　　果

西湾、東湾、全湾の平年偏差比と、観測値の最高値、最低値から見た、平成22年における陸奥湾の海況の特徴は以下のとおりである。

1　透明度の年間の推移は平年に比べ、年間を通じ、平年並みからやや低めの範囲であった。

透明度の全調査点の最高値はSt.6・9月の17m、最低値はSt.A・4月の7mであった

2　水温の年間の推移は平年に比べ、5月に西湾でかなり低め、9月の全湾及び10月の西湾ではなはだ高め、10月の全湾及び12月の全湾でかなり高め、その他は平年並みからやや低めの範囲であった。

水温の全調査点の最高値はSt.B・20m層の9月の26.63℃、最低値はSt.B・底層の2月の4.20℃であった。

3　塩分の年間の推移は平年に比べ、9月と11月の全湾及び10月と12月の西湾でかなり低め、その他は平年並みからやや低めの範囲であった。

塩分の最高値はSt.B・底層の9月の34.210、最低値はSt.5・0m層の7月の32.135であった。

4　20m層の溶存酸素量の年間の推移は平年に比べ、8月と12月の西湾、9月と10月の全湾でかなり低め、12月の東湾及び全湾ではなはだ低め、その他は平年並みからやや低めの範囲であった。

底層の溶存酸素量の年間の推移は平年に比べ、12月に西湾ではなはだ低め、9月の西湾及び12月の東湾、全湾でかなり低め、その他はやや高めからやや低めの範囲であった。

溶存酸素量の全調査点の最高値は、St.4・底層の2月の10.16mg/ℓ、最低値はSt.3・底層の9月の2.96mg/ℓであった。

溶存酸素飽和度の全調査点の最高値は、St.4・20m層の7月の103.97%、最低値はSt.3・底層の9月の38.68%であった。